
ONE PIECE 最強の転生者

横山 龍也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONE PIECE 最強の転生者

【Nコード】

N0864Z

【作者名】

横山 龍也

【あらすじ】

神様のミスで死んでしまった主人公は、三つの漫画の力を授かりONE PIECEの世界に転生させられてしまった。とりあえず主人公がすることは・・・？

プロローグ

「初めまして」

俺は誰かに声をかけられた。

ここはどこなんだろう．．．もしかして夢？

辺りは真っ暗で何も見えない。

そう思った瞬間、俺の前に光とともにやってきた女性。

「初めまして、私は全ての世界を統括する神です」

はあ？

なんか突然やってきた女が変なことを言い出したぞ？

俺は何がなんだかわからない状況に混乱している。

しかし、そんなこともお構いなしにその女が話始めた。

「あなたは死にました」

はあ？

本日二度目の混乱。

「あなたの人生はこれからでした。しかし私のミスであなたは死ぬことに・・・」

じゃーお前のせいじゃねーか！

夢だからなのかうまく声が出せない。

「お詫びとしてあなたをほかの世界に転生させます」

いやいや、勝手に決めるなよ神様。

「そうですねえどこが良いですか？」

どこがって・・・どんな世界があるかもわかんないのに良いも悪いもあるかよ。

「あなた・・・無口ですか？」

何も言わない俺に対して神様はそんなことを聞いてくる。
だから喋れないんだって！

「むうゝ仕方ないです。ではルーレットで決めさせてもらいますね
！」

勝手に決めるなよ！

てか、もうなんかルーレットみたいなもの回ってるし……。

ぐるぐるぐるゝ

てが多いな！

何だそのルーレット！

俺の目の前には1000以上の項目が書かれたルーレット。
俺って昔から動体視力だけは良いんだよなあ。

バンッ！

急に止まるルーレット。

そして、そこに書かれていたのは『ONE PIECE』。

え？ONE PIECEって・・・ワンピース？わんぴーす？
あの漫画の????

「ではONE PIECEの世界に転生させますね」

また勝手に言ってやがる。無理に決まってるだろ・・・てか死ん
じゃうって・・・。

「あ、今のままじゃまたすぐに死んじゃいますね」

おお？

もしかして俺の心が通じたのかい？

少し嬉しい俺。

「では3つの力を授けます」

神様がそう言っと、また回りだすルーレット。

いや、それもルーレットで決めるのかよ！

「決まりました。

一つ目は漫画『めだかボックス』のキャラクターである球磨川 楔
マイナス
の過負荷の力【大嘘憑き】
オルフィクション

。

二つ目は漫画『BLEACH』のキャラクターである朽木 白哉が持つ斬魄刀【千本桜】。

三つ目は漫画『Get Backers - 奪還屋 -』のキャラクターである美堂 蛮がもつ【邪眼】。

この三つです！それでは転生〜」

神がそう言つと俺は頭が痛くなり、気を失った。

黒瀬^{くろせしんいち}新一。 21歳。

身長172cm

体重55kg

容姿

黒髪で瞳の色も黒の日本人。

顔は上の中ぐらいのかっこよさ。

性格

優しく冷静沈着でおおらかなO型。しかしキレたら物凄く怖い一面も持つ。

能力

人並以上の運動神経とずば抜けた動体視力の持ち主。

神様から与えられた能力は【大嘘憑き】^{オールフイクション}、【千本桜】、【邪眼】の三つ。

【大嘘憑き】^{オールフイクション}

^{すべて}現実を虚構にするスキル。傷を負った現実そのものを「なかったこと」にして傷を負う以前の状態に戻したり、自分や他者の死、視力等の五感さえも「なかったこと」にできる（因果律に関与するスキルの為、自身の死に対しては自動で能力が発動し、死にたくても死ねない状態）。

【千本桜】

能力解放と共に刀身部分が目に見えないほどの無数の刃に枝分かれし、対象を斬り刻む。この刀身に光が当たることで桜の花弁を思わせるように見える。だが一方で、解放中は刀身が消えてしまったため、斬魄刀を通常の「刀」として使う事が出来なくなり、防御が手薄になるなどリスクも生じる。そのため力のある相手と接近戦を行う場合などには、あえて解放を行わず「刀」のまま剣技で戦うことも多い。

解号は「散れ『千本桜』（ちれ『くもんぼんぎょく』）」。卅解時にも唱えることがある。

【邪眼】

相手に1分間の幻影を見せる。複数人、動物にかける事も可能。2
4時間以内に3回まで、同じ人間に1度しか通用しないという制限
が有り（瞬きをしなければ同時に複数人にかける事も可）、この禁
を破ると世界から消滅し他者の記憶からも完全に消滅する。

ブログ（後書き）

さてこれからどうなるのか・・・。
とりあえず好きなように書きたいと思います！

マジで転生しちゃったよ・・・

目が覚めるとそこはあたたかい布団の中だった。

やっぱり夢だったのか・・・？

新一がまだぼーっとする頭でそんなことを考えていると、急に現実
に引き戻された。

「目が覚めたようだね」

女の人の声。

新一は身体を起こし、その声の主を確認した。

「・・・・・・・・!!」

見たことがある姿。
あれは・・・・・・・・。

ノジコ？

なんと新一の目の前にいたのはONE PIECEに登場するキャラクターのノジコだった。

やっぱり夢じゃない・・・？

それを確認するために、新一はノジコに話しかけてみる。

「ここは？」

「ん？ここはココヤシ村だよ」

やっぱりそうだ！

俺は本当にONE PIECEの世界に転生してしまったのだ。

「何も覚えてないのかい？」

ノジコは俺を心配しているようだ。

俺はとにかく情報を得ようと「ああ」とだけ答えた。

「あんだ、この家の前に倒れてたんだよ？本当に何も覚えてないのかい？」

覚えていないわけじゃない。

むしろ頭も覚醒してすっかりしている。あの神様とかいうやつのもも……。

俺ははつきりと確信した。

本当にONE PIECEの世界に来たんだと……。

それがわかっただけでいい。

まずは、今が原作のどの辺りなのかをノジコに聞いてみよう。

「ノジコは一人暮らしなのか？」

とりあえず今の状況を知るのなら、この質問でいいだろう。

「あんたまさか……」

「？」

「変なこと考えてんじゃないでしょうね？」

なっ！！！！

質問を間違えたのか？勘違いされてしまった。

「あっはっはっは。冗談だよ！」

そういえばノジコってこんな感じだったっけ……。

「そっだねえ……。今はなかなか家に帰らない妹と二人暮らしかな」

妹……。。

ナミのことだ！
ってことはまだルフィはナミを仲間にしていない……。ってことでいいのか？

「そうなんだ。えっと……。俺、行かなきゃいけない所があるんだけど船とかあるかな？」

俺は確信を得るためにそう言う。

「……………」。

あんたがどうやってこの島に来たのかはわかんないけど、今はこの島からは出られないと思ったほうがいいよ」

「どっして？」

「この島はアーロンって海賊に支配されちゃってるのさ。」

アーロンはこの島に来る者も出る者も許さない……。だからこの島に船はないし、出て行こうとする気でもすぐに見つかって殺される」

やっぱりまだアーロンがいるのか。

ノジコの見た目は原作通り……。ってことはまだルフィは東の海にイーストブルーいるってことか。

なら……。俺のすることは、せつかくONE PIECEの世界に
来たんだからルフィと旅でもするか！

やることも決まったし、ルフィを探しに行こう！

俺は短絡的にそう考えた。

「ノジコ、なんかお世話になったみたいで……。ありがとな」

「いや、それはいいけど……。まさかあんたこの島を出るつもりじゃないだろうね？」

ノジコの表情が変わる。

「いやいや、ちょっと散歩してくるだけだよ」

俺は適当にそんなことを言っ て家を出た。

いやゝまさか本当に転生するとは・・・。

ん？

みかんの木の下に何か落ちてる。

俺は悪いと思っ たが、みかんの木の下に手を入れてそれを手に取っ た。

「これは・・・」

そこに落ちていたのは刀だった。

「もしかして・・・千本桜？」

そういえばノジコは家の前に俺が倒れてたって言ってたな。
この世界に来た時にみかんの木の下に転がっちゃったのか？

しかも．．．。

なんのサプライズかは知らないけど、今の俺の格好は死覇装^{しはくしょう}．．．
つまりは黒い着物だ。

さすがに隊首羽織^{たいしゅおひ}は無かったが、まあこの服装のおかげで刀を腰に
携^もえることが出来た。

俺は今アールンパークに向かっている。

目的はもちろんアールンをぶっ飛ばしてこの島を出て行くためだ。

あと、この3つの力がどれぐらい使えるか．．．俺の強さも知りた
いしな。

普通は修行とかして強くなるんだろうけど、2年とかかかったちゃっ
たらルフィたちは魚人島に行ってしまうし．．．。

ぶっつけ本番が俺のモットーでもある！

もしこれで死ぬことになってもそれはそれだ。

どっちみち一回死んでるらしいし、ONE PIECEの世界で楽しむためには強さがある。

アーロンを倒せたらそこそこ強いだろ！

とりあえず今のゾロやサンジより強いってことになるしな。

そんなことを考えながら歩いているが、まったくアーロンパークにたどり着かない。

「・・・・・・・・」

どこにあるんだ？

たしかココヤシ村から近かったような・・・。

「あゝあ、空でも飛べる能力にしてほしかったよ」

すでにやる気をなくしてる主人公・・・。

「てかなんでココヤシ村からなんだよ！こついつのっていきなりル
フィ発見！とかなるんじゃないの？」

「あ」

そんなことを言っていたらアールンパークが見えてきた。

「やべえ・・・緊張してきた」

三つの力を貰い最強かと思われた主人公だったが、心は一般人な新
一だった。

「やっぱ死にたくねえー」

マジで転生しちゃったよ・・・（後書き）

結局新一はアールンと戦うんですかねえ？

実際に転生したら絶対戦わないと思います。
だってアールンとか恐すぎじゃん？笑

新一、初めての戦い

とうとう来てしまった。

新一は今、アーロンパークの入り口前に立っている。

「行くか・・・」

意を決してそう呟くと扉わゆっくり開く。

おじゃまします・・・。

心の中でそう言う。

口には出さないぜ？
だってかっこ悪いじゃん！

「ああん？」

扉を開けた先にはアーロンがこちらを睨んでいる。

恐えええええええええ

「なんだてめえは？」

さらに声を荒げて言うアーロン。

まあ、いきなり嫌いな人間がやってきたら機嫌も悪くなるだろう。

そう考えていると、モブキャラである魚人が新一に近付いてきた。
本来ならルフィたちに一瞬、一コマで瞬殺される程度の奴らだ。

でも実際見たらめっちゃ怖い！

しかしそんな思いを悟られてはならないと、俺は強気な態度を取る。

「お前らがこの島を支配してるアーロン一味か……悪いけどお前らを潰させてもらう」

言った――――！！

うつわ、凄い顔でアーロンに見られてる……。

でももう後には引けない。

俺はゆっくりと千本桜に手をかけて、そして刀を抜い・・・・・・・・・・
抜けねえ！！

あれ??

そういえば刀って素人が抜くのは難しいんだっけ？

やたら堅いんだけど・・・・。

やばい！このままじゃめっちゃかつこ悪いじゃん！

くっそゝこんなことなら来る前に練習しとくんだった・・・・。
ぶっつけ本番が仇になってしまったよ。

んゝもしかして角度とか関係あるのかな？

俺はアーロンたちにバレないようにそっと刀を引き抜こうとした。

カキン・・・。

お？

なんかわかんないけど抜けた！！

「そんな物騒なものを持って何するんだ？」

アーロン一味のモブキャラたちが新一に近付いてきた。

えっと・・・確か解号は・・・。

「散れ・・・千本桜」

新一がそう言うのと千本桜の刀身が消えた。

「・・・刀身が・・・消え・・・」

モブキャラやアーロンたちも驚いている。

その瞬間、モブキャラたちが千本桜によって斬り刻まれた。

うつ．．．。

予想以上にグロい．．．。

俺の周りではモブキャラたちが血塗れになって倒れていく。

てか勝手に斬り刻まれたけど．．．まあ、初めてだしコントロールできないのも当然か？

あ、ここはかっこつけるところじゃね？

「俺はアーロンに用があるんだよ。雑魚は引っ込んでな」

言ってやったぜ！

ってかめっちゃアーロンが睨んでる。

「てめえ．．．よくも同胞を．．．」

アーロンはそう言いながら座ってたイスから立ち上がった。

で、でけえー！！

俺の倍はあるんじゃないか？

そう思わせるほどアーロンの身長はでかい。

「アーロンさん・・・あんたは座っててくれ」

お、ハチ、チュウ、クロオビの三人の幹部が出てきた。

痛え．．．．。

俺は三人の幹部に瞬殺された。

「シャーッハッハッハ。どうやら口だけの男だったようだな」

アーロンが笑っている。

「さてこの男どうするか．．」

クロオビは腕を組みながら言う。

「．．．殺せ」

アーロンが不敵な笑みを浮かべながら新一を見ている。

「この下等種族は俺の同胞を亡き者にした。こいつは殺して、捨て
とけ」

アーロンのその言葉を聞いたハチは倒れている俺に近付き「ニユ、
何か言い残すことはあるか？」と聞いてきた。

俺は薄れゆく意識で「雑魚が・・・」とだけ言った。

雑魚はどう見ても俺の方なんだが、最後までかっこよくいたいと思
ったために出た言葉だった。

ザクツ・・・

ハチは持っていた剣で新一の身体を突き刺した。

「シャーッハッハ、少しは気分もすっきりしたぜ。

だが、まだだ！このままココヤシ村にでも行って、あと2、3人ぶ
ち殺してやるか・・・」

「チュ、それはいい考えだ」

そしてアールンたち4人はスタスタと歩きだした。

あれ？

生きてる・・・。

新一の意識が戻る。

そうか！大嘘憑オールライクシヨンきが発動したんだ！

なるほど、なんとなくだけど発動の仕方が理解できた。

右手には千本桜もある。

「散れ．．千本桜」

バシユウウウウウ！！

「！！！？」

千本桜が八チ、チュウ、クロオビを斬り刻む。

そして俺はゆっくりと立ち上がる。

いきなり3人が血だらけになって倒れたので、ア－ロンは何が起きたのかわからない。

だが、後ろに感じた人の気配に驚愕した。

「どういうことだこりゃあ」

ア－ロンはキレた時の目で新一を見た。

めっちゃ怖いけど・・・やっぱりここは括弧つけるべきだろう？

『オールフイクション
大嘘憑き！』

『俺の絶命を・・・なかったことにした！』

マネさせてもらったよ球磨川。

でもここからは俺の戦いだ。アールンとの一騎打ち。

この戦いで力をコントロールしてみせる！

新一、初めての戦い（後書き）

いやゝ次はアールンとの戦いですが、どんな戦いになるのか。

ルフィたちはいつ登場するのか。

まったくわかりません！笑

長い目で見てください。。。。

隙だらけの戦い

【そういえば卍解ってどうやるんだ？

確か卍解取得には本体の具現化と屈服が必要だったはず・・・。

卍解とは・・・。

本体の具象化と屈服が必要。

斬魄刀解放の二段階目。始解同様に変形、特殊能力の付加などが伴うが、基本的に始解の能力・特性を強化したものである場合が多い。戦闘能力は一般的に始解の5倍から10倍と言われており、その強大さ故に斬魄刀戦術の最終奥義とされている。

また、卍解修得者は、斬魄刀の名を呼ぶ事なく始解することも可能。卍解に至るのは才能のある者でも10年以上の鍛錬が必要とされ、卍解修得者は例外なく尸魂界の歴史に永遠にその名を刻まれる。

具象化とは、対話の際に死神が精神世界に赴くのではなく、斬魄刀の本体を死神のいる世界に呼び出す事。卍解に至るのが困難とされる理由は、具象化に至るのが困難なためである。具象化した斬魄刀の本体を倒す事を斬魄刀を屈服させると言い、これに成功して初めて卍解を修得できる。

千本桜・・・卍解形態。

せんぼんざくらかげよし
千本桜景厳

斬魄刀を地面に向けて落とすと同時に解放。落ちゆく斬魄刀は地面に吸い込まれるように沈み、直後、所持者の背後から大量の巨大な刀の刀身が生え、それが塵のように舞って散る。「目に見えないほど小さい千本の刃」が能力である千本桜の刃がさらに増え、総数・億を越すほどの膨大な刃を出現・操作する。

見えない刃で斬りつける本来の用途以外にも、刃を圧縮して殺傷力の高い剣を造り出したり、相手を無数の刃で球状に囲んで逃げ場を無くしたりと非常に応用が効く。

この千本桜も同じようにしなきゃダメなのか？

それだと才能ある者でも10年はかかるって言われてるんだから無理じゃね？

でも始解は解号を言っただけで発動させることが出来た。もしかしたら卅解も意外と簡単にできるんじゃないか？

新一は刀の切っ先を地面に向けて「卅解！」と言って千本桜を地面に落としてみた。

キンッ・・・。

新一が落とした千本桜は重力に逆らうことなく地面に落ちた。

「やっぱり無理かぁ・・・」

いや、もう一回やってみよう！

次はもっと集中して、よくわかんないけど力を入れる感じで・・・。

新一はぶつぶつと何か言いながら千本桜を拾い、何に集中しているのかわからないが、とにかく集中した。」

「どういことだこりゃあ」

アーロンはキレた時の目で新一を見た。

『オールフイクション
大嘘憑き！』

『俺の絶命を．．．なかつたことにした！』

同胞がやられてキレてしまったアーロン。

新一を睨みながら体に入力を入れる。

『シャーク
鯨．．．オン・ダーツ
ON・DARTS！』

アーロンはそう叫ぶと新一を目掛けて頭から突進してきた。

「はっや．．．！！」

ザクッ！！

アーロンのノコギリのような鼻が新一の心臓を突き刺す。

鼻に突き刺さった新一を地面に叩きつけるが、新一は「大嘘憑き」オールフイクションと言って立ち上がった。

新一はアーロンに対抗しようと千本桜を解号させようとするが、アーロンの鯨・ON・DARTSシャーク・オン・ダーツが速すぎて反撃できないでいた。

アーロンも千本桜の力を見ているので警戒しているのだろう。攻撃の手を休めずに新一を即座に、何度も殺していく。

しかし、何度殺しても立ち上がる新一にアーロンは苛立ちを隠せない。

しかし同時に、新一がなんらかの理由で死なないことを確信するアーロン。グランドライン偉大なる航路出身の彼は新一が“悪魔の実”の能力者であると推測した。

不死身・・・そんな能力があるのかと疑問も感じたが、実際に死なない新一を前にしてそんな疑問は無意味だと悟った。

「死なないということはわかった・・・だがこの俺が下等種族である人間に負けるわけがない」

アーロンはそう言うとな新一を掴んで持ち上げた。

それと同時に新一が持っている千本桜を奪い、海に沈めた。

「死なないというのならこのまま殺さずに生かしてやる！」

新一がアーロンの言葉を聞いたのはここまでだった。アーロンが新一の首に手刀を入れて気絶させたのだ。

【よし！正解は出来た。

あとは白帝剣はくていけんにしてみよう。

新一は正解が出来た喜びからなのか、軽い感じでやろうとしていた。

終景・白帝剣しゅうけい・はくていけん。

千本桜景巖の全ての刃を押し固め、一振りの究極の剣にした形態である。

「終景・・・白帝剣！」

シューウウウウウ・・・」

アーロンが新一を持ち上げてしばらく経った。

（どうやら復活しねえようだな）

新一が復活しないことを確認するとアーロンの口角が上がる。

「シャーツハツハツハ、これで安心だな。このままどこかの土にでも深く埋めれば復活してもまたすぐに死ぬだろう」

どうやら無限に繰り返す死を考えているようだ。

確かに大嘘憑オルフィクシオンきでもこれなら復活できないだろう。

まあ、土をなかったことにすれば助かるかもしれないが、さすがにそれは新一には出来ないだろう。

アーロンは新一をとりあえず地面に叩きつけ、指定の椅子であらう場所に座る。

「シャーッハッハッハ」

「・・・一分」

パキ・・・

パキパキパキ・・・

パリーン！！

ザクッ・・・。

「・・・！！？」

今までアールオンがいた世界がまるでガラスのように碎け散り、白帝

剣でアーロンの腹部を刺している新一がアーロンの目に映った。

「お前が今まで見ていたのは幻だ．．．。残念だったな、アーロン」
「！」

俺はまんまとアーロンを出し抜いたことでテンションが上がり、クールなキャラを演じていた。

ふっふっふ．．．決まった。

「ふっ．．．下等種族が．．．一体いつから．．．」

アーロンは口から血を吐きながらも聞いてきた。

「お前がキレて俺を見た時さ．．．」

俺のその言葉を聞いてアーロンは倒れた。

隙だらけの戦い（後書き）

なんかアーロンのキャラが崩壊しすぎ？でしたね・・・泣

説明も多くてすみません。でもお気に入り登録が多くて作者は嬉しいのです！笑

テンションだけで書いてる感じもありますが・・・こんな作者でもよろしくです！！

新たな力

勝った・・・？？

アーンに・・・

「勝ったんだーーーーー！！」

俺は嬉しすぎて思わず叫んでしまった。

これで俺もONE PIECEの世界の住人としてやっていけると
思った。

そんなに甘くはないのにね？

ドゥルルン！

「？」

突然目の前が真っ暗になった。

え？

なにになに？？

「この世界を大いに楽しんでいるようだね」

新一の目の前に現れたのは、この世界に転生させてくれて三つの力までくれた神様だった。

「え？な、何？」

いきなりのことで動揺する新一。

「やあやあ新一くん。実は君に言い忘れたことがあってね・・・」

言い忘れたこと？

「何ですか？」

俺は恐る恐る神様に聞いてみる。

「実は君がこの世界で原作キャラを倒すたびに新しい力をあげる！
・・・っということを言い忘れたんだよ」

．．．新しい力？

おおおおおおお！！

めっちゃラッキーじゃん！

ってことは俺はもっと強くなれるってこと？

「じゃ、じゃ、そうですねえ．．．」

俺はどんな力にするのか悩んでいる。

「あ、ちょっと待って！」

「？」

神様は考えている俺の横に巨大なルーレットを出した。

「え．．．まさか．．．」

「そう！最初がルーレットだったんだからこれからもうそうしようと思ってる」

．．．やっぱり？

人生はそんなに甘くないと思った新一。

がっかりとしている新一を無視するかのようにルーレットが回りだす。

くっそー！！

これじゃーまたどんな力を貰えるのかわかんないじゃん！

最初に貰った力は俺も原作読んでたからなんとか使えたけど．．．
．．．全然知らない漫画とかになったらどーすんだよ。
俺はぶつぶつと文句を言いながらもルーレットが止まるのを待った。
力が貰えるのは素直に嬉しいしね。

ダンッ

どうやらルーレットが止まったようだ。

「決まったね！では四つ目の力は・・・」

今さらだが俺にはルーレットで何が出たのかはわからない。
というのも書いてる字が読めないのだ。

いや！

決して俺が日本語が読めないほどの学力ではないぞ？

字が日本語ではないのだ。

「四つ目の力はゲーム『ポケットモンスター』の技から・・・」

え？

ポケットモンスター？？

って・・・ポケモン！？

もう嫌な予感しかないよ・・・。

「【はねる】に決定しました!!」

ギャヤヤヤ——!!

【はねる】

はねるだけで何も起こらない。ポケモンシリーズ最弱の技。

せめて……

せめて…………ほえるでしょーーーーがぁーーーー!!

「じゃあ、帰るね!」

そう言つて神様はどこかに消え、新一は涙目でアールンパークを見つめていた。

トントン…………。

トントントン…………。

「…………とりあえずココヤシ村に帰ろう」

新一は何回かはねた後、ココヤシ村に向けて歩きだした。
その道中で千本桜を鞘から抜く練習をしようと決意したのは言うまでもない。

新一がアールンパークの入り口に差し掛かった時、誰かの叫ぶ声が

した。

「おーーーーい、お前！どけよ！」

ん？

子どもの・・・声？

「俺はアーロンを殺しに来たんだ！」

「俺の父ちゃんはアーロンに殺されたんだ！どかないとお前だつて殺すぞ！？」

俺は入り口の扉から外の様子を見てみた。

ああ。

そういえばあんな子どももいたなあ。

俺が見たのは黄緑色のニット帽にオレンジ色のＴシャツ。そのＴシャツには『今』と書かれている。

あれは．．．ナミ！

その少年の目の前にはバックを肩に担いだナミが立っていた。
少年は剣を両手で持っており、涙を流し、震えながらナミに向かって叫んでいる。

え．．．と、ここにナミがいるってことはもうルフィはこの島に向かっている？？

しかもウソップやゾロは島に着きそうなんじゃないか？

俺はそんなことを考えながらも今後の展開を必死に思い出した。

（原作通りなら！）

その子どもにイラッとしたのか、ナミは胸元から組み立て式の木の棒を取り出してその子どもを殴ろうとする。

パシ．．。

「やめなよ」

なんとか振り上げられた木の棒を掴むことに成功した。

てかめっちゃ痛え．．。やっぱりナミは力があるなあ．．。

殴られずにすんだ子どもは目を見開いて俺を見ている。

「あんた．．．誰？」

ナミが俺の方に振り向いて言う。俺は木の棒を離してナミと向き合った。

「魚人たちなら俺が壊滅させたよ」

いきなりの俺の言葉にナミは動揺しているようだ。

「はあ！？」

やはり信じられないのだろう。
まあ、当たり前か．．．。

「信じられない？」

「あ、当たり前よっ！！」

だろうね。だけど．．．

「ならこの扉を開けて見てみなよ？」

「……………」

ナミは何故かそこから動かない。

先に動いたのは少年だった。

少年は泣いていた顔もすっかり晴れ、扉に向かって走って行った。
パンツと開かれた扉を少年とナミは無表情で見ている。

二人の目に飛び込んできたものは血だらけになり、倒れている魚人の数々。

その中にはアールンもいた。

「うそ……………」

ナミはその光景を見てうつすらと目に涙を浮かべている。

少年は俺たちの方に振り返り、笑顔で言葉にならない声を出していた。

先ほどまでまるで怒った顔をしていたナミがまだ信じられないという言葉を発しながら顔に手を当てて泣いている。

今思ったけど……………

実物のナミめっちゃかわいいじゃん!!

俺はその場に不相应な思いを押し殺して……ないけど、なんとか堪えてナミに話しかけた。

「泣いてるところ悪いけど、あんたにいくつかの願いがあるんだ」

「え？」

あ、今思い出した……あの少年の名前……チャボだ!!

新たな力（後書き）

最後はどうでもいいですよねぇ。笑
でもなんとなく入れたかった！

いやぁ〜やっとな？原作に介入出来そうです。。。

まあ、結構早めでしたね。。。。

次はルフィ出せるかなあ？

それは、次章のお楽しみで！！

ナミへのお願い

「俺、みんなに伝えてくるよ!」

そう言つて少年・・・チャボは走つて行つてしまった。

チャボを笑顔で送り出した俺にナミは話を戻すように言う。

「本当にアーロンたちをあんたが一人で?」

まだ信じてなかったのか・・・。

「ああ、そうだよ」

「そつか・・・・・・ありがとう」

最後のお礼の言葉は小さく言つてたけど聞こえていたぜ。

俺はそんなナミに微笑む。

ナミはそんな俺を見て「な、何よ?」と強めに言っていたが、怒っていないことはすぐにわかった。

「それで．．私に頼みって？」

ああ、そうだった。

俺はナミにいくつかの頼みがあると言ったんだ。

「まず一つ目は、海軍を呼んでくれないか？」

俺はこの世界に来たばかりで海軍への連絡方法もわからないし、アーロンたちをこのまま放置しておくわけにもいかないだろう。

「もちろんあんたがアーロン一味ってのは黙ってるからさ」

俺はそう付け足すと、ナミは「わかった」とだけ言った。

とりあえず俺の頼みとやらを全部聞きたいのだろう。

しかしその時、4人の男が現れた。

「???」

「．．．」

俺たち2人の前に現れたのはあの海軍大佐のネズミだった。

こいつかあゝちょうど良かった！

「チチチチ．．．．今日は何というラッキーデー。戦いの一部始終を見させてもらった」

え？

こいつ見てたの？

あ、そうか．．．原作ではアールンに金貰いにきてたんだっけ。その後でナミの家に押しかけるんだっただか？

「まぐれとはいえ、貴様のような名も無い奴に魚人どもがよもや負けようなどとは思わなかった」

うん、大正解！

完全にまぐれでした。

「だが、おかげでこのアールンパークに蓄えられた金品は全て私の物だあ！

貴様の手柄、この海軍第16支部大佐ネズミが貰った！」

うわぁーなんか凄い興奮して喋ってるよコイツ．．．。

「ナミ。一つ目を取り消して、コイツをぶっ飛ばしてくんね？」

俺のその言葉にナミはすぐにOKした。
ナミもムカついてたんだきつと・・・。

「お、お前ら・・・俺に手を出してみろ・・・ただじゃすまない
からな！」

え？

まだ何もしてないのに、ナミが武器出しただけでビビってるよ・・・
。本当に大佐か？

ドガッ！

あ。

バキッ！

デ
ユ
ク
シ
ユ
！

ガンツ！！

ナミは間髪入れずにネズミ以下3人をボコボコにした。

「これでいい？」

うわあーちょー！恐えええええええ！

「ああ、十分だよ」

俺は冷静を装ってそう言う。

そしてナミは倒れたネズミの髭を引っ張りながら。

「あんたたちはこれから魚人たちの片付け！それとゴサの町の復旧に協力！」

アーロンパークに残った金品には一切関与しないこと！あれは島のお金なの！わかった？」

ナミがそう言うのとネズミは「い、痛い痛い・・・言う通りにします」と言ったので、ナミはネズミの髭を離した。

「覚えてろよ黒服の男！」

ええ？

俺じゃないだろ！ナミだろ！

と心の中で思ったが当然口には出さない。

「お前のことを調べ上げてやるからな！」

あ、このままじゃルフィが賞金首にならない？

そう考えた俺は、ネズミの耳元で「俺たちは海賊だ。船長はモンキー・D・ルフィ。麦わらの一味だ」と小声で言った。

それからネズミは何かを叫びながら俺たちの前からいなくなったが、俺はもうどうでも良かったためにほとんど聞いてなかった。

さてと・・・。

「急な邪魔が入ったけど、続けるぜ？」

「え？あ、うん」

ナミは思い出したかのように俺の方に体を向き直した。

「えっと、二つ目はあんたが麦わらの一味に入ること」

「！！！？」

ナミはなんであんたがそんなこと・・・とでも言いたいのだろうか、俺はすかさず次の頼みを話す。

「三つ目は俺について何も聞かない」

「・・・・・・・・っ」

この言葉でナミは俺に言いたいことを止めたのだろう。開こうとした口を無理矢理閉じた。

「最後に．．．俺は麦わらの一味に入りたい。そこで、ルフィにあんたが口添えしてほしい」

「どうして．．．」

ナミが何か言おうとしたので、俺は「俺について何も聞かない」と念を押した。

「ダメな頼みはあるかい？」

俺がそう言つとナミは少し考える素振りを見せたが、すぐにすべてを了承してくれた。

「あんたには大きな借りがあるしね」

そう言つてナミは右手を差し出した。

「私、ナミ！ルフィの仲間になるなら、私とも仲間ってことよね？」

俺はナミの右手を取り・・・。

「黒崎 新一。よろしくな・・・ナミ」

「シンイチ？なんか呼びにくいわね・・・」

そう言つとナミは俺に背を向けて歩き出した。

「何やってんの？早く村に行くわよ、シン！」

どうやら俺はこの世界でシンと呼ばれることになるんだろうなあつ
と思ひながらもナミと一緒にココヤシ村に向かった。

その道中で「ココヤシ村っていう村があるんだけど」と、ナミは
嬉しそうにココヤシ村について俺に教えてくれた。

まあ、ココヤシ村は知ってるんだけどなあゝっと思ひながらも、ナ
ミから聞く話は原作にはなかった話などもあったので新鮮で退屈せ
ずに歩けた。

しかし、時折左肩を見て悲しい顔をしていた。

そっか・・・俺がアーロンを倒したことによって、ナミはこの左

肩をナイフで刺さない。

一生消えない刺青がナミを苦しめるのなら．．．。

「ナミ、ちょっと目を閉じてくれない？」

「え？なんで？」

まあ、いきなり目を閉じては不自然だったか？

「いいから5秒だけ閉じて」

ナミは少し疑い「変なことしないでしょ？ね？」と言いながらも目を閉じてくれた。

目を閉じたのを確認した俺はナミの左肩に触れた。

ナミは一瞬身体を固まらせたが、俺が開けていいよと言うと安心して顔を見せた。

「これ．．．一生消えないのに．．．．えっ!？」

目を開けたナミは自分の左肩を触ろうとして動きが止まった。

「な、なんで???刺青が．．．」

そう。

みんなもご存知の『オールフィクション大嘘憑き』だ。

でもまだナミには言わないけどね！

「これ、シンがやったんでしょ？」

ナミが掴みかかるんじゃないかと思われるほどの勢いで近付いてきたので、俺は「さあね」とはぐらかした。

このやりとりはココヤシ村に着くまで続いたが、俺は最後まで言わなかった。

ナミへのお願い（後書き）

なんか全然進んでないような・・・笑
なので1日に出来るだけ更新したいと思います!!
みなさん、よろしくです♪

道化師？

ん．．．。

「あ、ここは．．．」

一人の男が深い眠りから覚める。

「アタシン家だよ」

気がついた男に女が話かけた。

「へ？へえ？」

「気がついた？」

「あ、お前は．．．」

「アタシはノジコ、ここでみかん作ってんの」

どうやらノジコとウソップのようだ。

ゴサの町で魚人と遭遇したウソップはノジコを助けるために魚人と戦おうとしたが、逆にノジコに気絶させられて今に至る。

原作ではここにゴサの子ども．．．チャボもいたが、ここにはいな

い。

「おーーーーーい、みんなあーーーーー」

ウソップとノジコが話していると村中に聞こえる声で子どもが叫んでいる。

村から離れた位置にあるノジコの家にも声が届いているのがその証拠だろう。

「な、なんだ!？」

ウソップが何事かと立ち上がって窓から外の様子を見ている。もちろんここからは何も見えないのだが・・・。

「・・・・?」

ノジコも村の方から聞こえる元気な声に、違和感と興味からか耳を澄ませている。

アーロンがこの島に来てから、誰もこんな元気で嬉しそうな声を出したことがないのだろう。

おおおおおおお!!!!

村の方からまるで地響きが起きるのではないか？というほどの村人たちの声が聞こえる。

何かあったのか・・・ノジコはそう考え、急いで家を出て村に向かった。

その行動を見ていたウソップもノジコに次いで家を出る。

「何かあったの？ゲンさん！？」

ノジコは村に着いてすぐに近くにいたゲンゾウに聞く。

「おお、ノジコー！」

ゲンさんもなんだか嬉しそうな顔をしてノジコを見た。

「聞いて驚くなよ？」

「な、なに？」

ノジコは何が起こっているのかわからないため、不思議そうに聞く。その時、ノジコの後を追っていたウソップも村に到着した。

「あのアーロン一味が壊滅したそうだ!!」

「ええ!？」

ノジコは信じられないと言った感じでゲンさんを見ている。

「我々も今この子から聞いたんだが・・・」

そう言っただけでゲンはチャボを見た。

「あの子が？」

ゲンの目先にいる子どもをノジコも見た。

「でも、どうして・・・」

ノジコがそう呟くと、チャボはここにいる全員に聞こえるように「俺、見たんだ! 魚人が血だらけで倒れてるところを!!」と言う。

村人もチャボの言葉を信じていないわけではないが、全員で確認しに行くことにした。

一人一人が念のため武器を持ち、今まさにアーロンパークに向かうと一歩踏み出したその時、アーロンパークへの道から歩いてくる2つの人影が見えた。

「ねえ！どうやってあの刺青を消したのか、いい加減教えなさいよ」

ふう．．．。

ナミってしつこいんだなあ．．．．。

さっきまで嬉しそうに昔話してたじゃないか。

ん？

ココヤシ村に人が集まっている。

ああ、チャボがみんなに知らせたんだった。

俺はナミの質問を回避しようと「ココヤシ村に人が．．．．」とナミに話しかけた。

「わかってるわよそんなこと！」

見ればわかる。っというようにナミが言う。

ココヤシ村に足を踏み入れた俺たち2人に村人たちが走って寄って来る。

俺たちつかナミにだが……。
ノジコだけは「アンタ……」と俺に気付いてくれた。

村人たちはナミに魚人のことについてとかいろいろ聞いている。
魚人たちの壊滅がナミの言葉によって確定したので、村人たちは涙を流しながら喜んでいる。

今夜から騒がしくなりそうだ。

俺が少し離れたところからナミや村人たちを見ると、アーロンパークの方から大きな音がした。

しかし、村人たちは特に聞こえていなかったのか気にするような素振りは見えない。

俺も特に気にしなかった。

ん？

いつの間にかウソップが俺の横にいた。

近くで見るとやっぱり鼻が長い。俺は衝動的にウソップの鼻を掴む。

「って何してんだデメー！ー！！」

おお！ウソップの初ツッコミだ。

それからウソップにガミガミ言われたが、俺は愛想笑いで受け流す。

「ナミ！ー！ー！ー！ー！！」

突然聞こえた大きな声に今まで騒がしかった村人たちも静かになった。

「ルフィ！！」

俺の隣にいたウソップが声の主に反応して言った。

生ルフィだ！！

俺はルフィを見て感動したが、顔には出さずにルフィを見ていた。

それから数時間が経ち、夕方になったココヤシ村にはアローン一味の壊滅の知らせを聞いた島中の人間が集まって宴会をしている。ルフィたちも何がなんだかわからないのに宴会に参加しているところを見るとさすがと言っべきか．．．。

もちろん、ココヤシ村に到着したルフィの仲間のゾロは“鷹の目のミホーク”との戦いでついた大きな傷の手術。そんなゾロも手術終わりの体で宴会に参加していた。

「ルフィ！」

俺は生ハムメロンを探していたルフィに声をかける。もちろんナミも一緒だ。ルフィは両手に肉を持ちながら「ん？誰だオメー？」と俺を見てそう言う。

「俺をルフィの仲間に入れてくれないか？」

単刀直入に言った。

ルフィが俺をまじまじと見ている。

．．．肉を食いながら．．．。

「ルフィ、私からもお願い！シンは私たちを救ってくれたの！悪い奴じゃないってことは私が保証するわ！」

俺の横にいたナミがそう付け足してくれた。

ルフィは食べている肉をゴクリと飲み込むと「お前シンって名前なのか！いいぞ！」と言った。

軽っ！！

さすがルフィだ。

こうしてルフィたちの仲間になった俺は後々ゾロたち3人も紹介された。

ウソップには「もう鼻を掴むなよ？」と言われたが、それは約束できない。

そして数日後の朝、ココヤシ村の村人たちに見送られて麦わらの一味は出港することになった。

地味にヨサクとジョニーも挨拶していたが、俺はそういえばいたんだ．．．という感想しか持たない。

メリーに感動しすぎて忘れてたよ。

もちろんあの宴会の時にノジコとも話をした。

俺を助けてくれた？お礼の言葉とある約束をノジコと話したのだ。

それからナミが俺のことを村人たちに話したことによって、宴会は俺にお礼を言いたいという人たちで溢れかえった。

おかげでほとんど寝れずに今に至るわけだが．．．．。

「船を出して!!」

そんな中で不意に響いたナミの声に、意味が分からないながらも俺たちは船を出した。

村人達に礼を言わせる事も、また別れを言う事も無く行ってしまうのかと、船に向かって走り出すナミを皆が止めようとするが、彼女は人々の間をすり抜けると一気にゴーイングメリー号に飛び移る。

そしてTシャツの裾を上げ、村人+ジョニー・ヨサクの全員から盗

んだ財布を甲板に落として見せた。

「皆、元気でね」

「やりやがった、あのガキヤ——ッ！！！！！」

ここは原作通りなんだと思うと感動してしまうシン。

そんなナミに泥棒猫とか、財布を返せとか、そんな言葉に混ざって、いつでも帰って来い、元気でやれ、そんな風に村人たちは叫んでいる。

彼らもまた、それがナミらしさであり、これから楽しんで欲しいと思うからこそそう言ったのだろう。

ナミは満面の笑みを浮かべ、叫ぶ。

「じゃあね、皆！！！！行って来る！！！！！」

船から見たアーロンパークは粉々に崩れていた。

そう思った後ろでルフィたちが「あれ、魚人たちの家だったんだな」などと話している。

もしかして原作とは違う場所のアーロンパークに船ごと突っ込んだのか？と思ったが口には出せないよな？

そして、ココヤシ村出港から数日が経った。

俺たち麦わらの一味は“グランドライン偉大なる航路”を目指し、船を進めている。

ウソップは後ろの甲板で“タバスコ星”とやらを開発中だし、サンジはナミが故郷から持ってきた蜜柑の木の警備をしている。

どうやらルフィがその蜜柑を盗もうとしたので警備しているようだ。

ナミは買ったばかりの新聞を読み進め、ゾロは甲板で一人、昼寝の体制に入っている。

俺は特にすることもないので、アーロンパークからの帰りの道中に

出来なかった千本桜の出し入れの練習を誰にも見つからない所でしていた。

ん〜やっぱりあれはまぐれだったか・・・。

全然抜けねー！。

その時、「」「」「ああああ——っ！！！！」「」「」という声が船に響き渡った。

俺はルフィたちの所に駆けつけると、みんなが見ている紙に視線を落とした。

「なっはっは！見る、シン！俺たち“お尋ね者”になったぞ！」

そこには2枚の手配書があった。

モンキー・D・ルフィ

（麦わらのルフィ）

懸賞金：3000万ベリ

これは原作通り・・・あとの1枚は・・・。

クロサキ・シンイチ

（道化師）

懸賞金：2700万ベリ

おお！！

俺も賞金首に！！

でも道化師って・・・。

おそらくアーロンとの戦闘を見ていたネズミのせいだろう。

サンジとウソップは新入りがいきなり懸賞金がついた俺に納得がいかないようだったが・・・。
ウソップはルフィの手配書に写っている自分の後頭部を発見して満

足しているようだった。

俺たちが手配書で騒いでいると、ゾロが「おい、島がみえるぞ」とナミに言った。

「あの島が見えてきたってことは、グランドライン偉大なる航路に近ずいてきたってことね」

ナミはルフィたちに説明するように言う。

「あそこには有名な町があるの。」

『ローグタウン』・・・別名、“始まりと終わりの町”。かつての海賊王、ゴールド・ロジャーが生まれ・・・そして処刑された町。

・・・・・・行く？」

ルフィはそのナミの言葉に「行く!!」とだけ言った。

そして俺たちはローグタウンに上陸する。

道化師？（後書き）

なんかあれよあれよと言う間にルフィの仲間になってしまいました。笑

今回はローグタウンまで書きたかったので少し長く、そしてちょっと薄くなってしまいました．．．泣

でも、今の俺ではこれがベストです！

シンの感情ももっと入れたかったのですが．．．まあいいでしょう！笑

あ、これから新一のことはシンに統一させますね。。

でも、黒崎 新一という名前は忘れないであげてください！笑

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0864z/>

ONE PIECE 最強の転生者

2011年12月7日04時00分発行